
本心

唯之 空希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本心

【コード】

N0955I

【作者名】

唯之 空希

【あらすじ】

掌編にあらすじなどは必要無いと思われる。短いだから、読めば解る。

「貴方は本当に駄目な人ね」

女がそう告げた時、私は思わずぞつとした。場末の居酒屋で、その人と久し振りにあつていた時の事である。もう少し詳しく言えば、その人は、小学から同じ道を通い、同じ釜の飯を食った今では数少ない仲間の一人であつて、所謂幼なじみの体であつた。

「今日の貴方の口癖を借りるなら、本当に全然なつてないじゃないの。ほら、顔なんか赤らめちゃつて。お酒の量も見なさいよ、一升くらい飲んじゃうんじゃない？ ああ、あきれた」

女は尚も糾弾し、自分の猪口に徳利を掲げて半分ばかり飲んだ。

私は口惜しくて口惜しくてどうにもならず、胸は熱く火照り、目頭も熱くなり、かと云えばエア・コンの冷風が足先を冷やして正にあべこべ、女が持つていた徳利を奪つて自酌する他に手は無く、

「ああ」とも

「うん」とも付けぬ生返事を繰り返しながら徳利を抱え込み、猪口に注いで一息で飲む。それはもう、ガブガブ飲む。やりきれないのである。

女は呆れた顔そのままに三点盛りの刺身から鮪だけを選んで不味そうに食べ、秋刀魚と烏賊だけを残して口を拭いた。

そうして、吐き捨てるように告げた一言は

「お会計」、それには私も大いに慌て、

「ちよつと待て！ まだ良いじゃないか。それじゃああんまりだよ。土台、まだ十時じゃないか、さあ、飲もう。久し振りに飲んでるんだから、さあ、ね？」必死に粘った。時刻は、まだ十時の頃であつた。周りの客達はドンチャン騒ぎ、花火を見た客が帰りしなにと流れてきているのだ。今宵は近所の河川敷で花火大会があつて、九時までは燦々たる輝きと猛烈な爆発音で以て空を赤黒く照らし、賑やかなものであつた。かく言う私達も、その花火大会を見た後此処に

寄ったのである。店内には浴衣で来ている客などもおり、私も唯一持っている甚平を着込んでの来店であった。

「全くもう。もう少しだけだからね」

女は私の説得が功を奏したのか、持ち上げようとしていた腰を落ち着かせ、片肘を付きながら私を見た。どこはかとなく憐憫にも見て取れた。が、私は先程のキツイ目つきよりは傷つかなかった。居てくれれば、それで良いと思ったのである。

「ねえ、董。何か食べたらどうだい。ほら、この島ほっけなんて脂が乗ってそうだよ？ いや、こっちの唐揚げも良いよ。ああ、待て。出店で食べたからなあ。やっぱり……」

私は幾分擦り切れたメニューを見遣りながら、董に言う。女の名前は、董と言った。確かに、紫の似合うような女だった。妖艶な香漂う馥郁とした肢体は、中々に魅力的で、顔は余り美人とは言えなかったが、何処か影のあるような、例えば、夜霧に紛れる一輪の弱き花のような含みを有しており、私は実際好んでも居た。

「ねえ、だから、私は貴方のそう言う所が駄目だって言っているの。刹那主義に生きてきて、貴方は今まで何を生み出したのよ。友達だって、みんな結婚してるじゃない。瞬間が大事？ それは、その場しのぎのおべつか。そして、貴方のその場しのぎのおべっかが私は嫌いな」

董は未だに片肘を付いたままで、私を見遣る。凜としていた。少し、見惚れた。

そうして、その発言は物の見事に的を得ていたのである。私は返したかった。けれど、駄目だった。人間には、この人には叶わないと思うような人間が居なければならぬ。そんな訊いた事も無いような慰めを自分自身に課したりした。私はうんうんと頷いて、酒を煽った。少し、辛い。

「まあ良いじゃないか。これが僕の性格なんだ。傾向なんだよ」

私はそう言いながら額の汗を拭う振りをして、目を拭う。どうやら気付かれなかった様で安心したが、これこそが我執なのかと思う

と、流石に暗澹たる気持ちになった。

「全く、これ飲んだら行くわよ。貴方も帰れなくなっちゃうわ。明日は仕事？」

「いや、休み」

「はあ……」と董は呆れ、

「貴方、偶には何処かに旅行でも行ってきたら良いんじゃないの？ 熱海でも塩原でも行ってきたら良いじゃない」

「いや、良いよ。どうせつまらないし……。友達も付き合ってやれないだろうし」私は言う。

先程から遠くの席で一気飲み of 掛け声が聞こえ、私は不意に昔の事を思い出していた。

みんな、遠い思い出になっていた。

しかし、感慨深くなればなるほど、董は時計を気にするので、私は最後の一献を強引に含むと、

「じゃあ、うん、行こうか」先手を打った。今日の私は余りにも決まらなかったから、最後まで、と云う心持ちからである。

もしかしたら、と私は少しだけ過ぎたが、董は店員を呼ぶ為のブザーを押し、遣ってきた店員に指でバツの字を作って見せた。

私は横目で見ながら烏賊の一切れを口に含み、残すわけだ、と思った。

会計を割り勘で払い外に出ると、未だ硝煙の香が漂った。幻覚だったのかも知れない。ただただ、感を見ていた。

「送るから」と董が言ったので、私は

「大丈夫」とだけ言い、セブンスターに火を点ける。董の家は此処から近い距離にあったが、私の家は微かに離れていた。飲酒運転は駄目だから、と放って、千円握らせようと鑑みたが、

「大丈夫よこのくらい。それよりも、貴方はタクシー呼ばないの？」
逆に問われた。それは、先程からうって変わって、優しい声色だった。

「ああ、僕は歩くのが好きだから」

私はそう返し、遠目に見える河川敷を目に映した。ざつくばらんに花々は咲き乱れ、今はもう屋台も何も無く、閑散たる有り様だったその光景を。その居酒屋は山間にあり、地元の街が、河川敷も含めて一望出来るのだ。此処は、今になっては殆ど訪れる事も無い、若きし頃の溜まり場だったのである。

「うん、そつか。別に構わないけど、事故には気を付けなよ？ 貴方は吸い込むわ」

放つ董。その発言が難解で、私は黙考した。だが、

「大丈夫さ」苦笑する。

「ふふん、そうかな？ まあ良いわ」そう言って、董は軽自動車のエンジンを掛け、開いたドアの窓から私を見つめる。

その刹那。

「なあ、董。僕達、やり直さないか？」

私は、何故かそう言ってしまった。余りに馬鹿げた冗談だった。

「なあんてね」

私は滑稽を気取る。その一言で、充分な筈だった。この一言で君は看破してくれるだろう。解っている君だからこそ、この一言を嫌うだろう。そんな、達観にも似た感情があった。

けれど、董は

「本当に馬鹿ね」そう言いながらも、車のドアを締め、ゆっくりと私の元へと歩み寄ってくる。

「馬鹿さ。みんな馬鹿なんだ。頭の良い人間なんて居ないよ。みんな、馬鹿ばかりなんだよ」

私は、まだ気取った。見破られたくは無かったのだ。けれど、
「本当に、困った人」

董はそう言って、私の伸びきった前髪を指で掬う。それは、何処かしら母の愛にも似ている様な、胎児の夢を私に抱かせた。

……頬に、温もり。女の髪が、私の鼻を触れていった。

「幸せになっただね」

董は離れると、私を見つめた。街頭に反射して、瞳がきらりと光った。そうして、駆けるように車に乗り込み、私の事を一瞥すらせず、車を走らせていった。

私は呆然とし、兎角歩き出す。家とは真逆なその河川敷に向かって。転んだ。私はすぐさま立ち上がり、ずんずん歩いた。やがて、草花の生い茂る河川敷に辿り着く。私は探す。

どこだ！ どこにある！

無学者の私にだって解っている、だが、感性が許さぬのだ。どこだ！ 美しく、か弱きその花は！

紫の花を、辛うじて見つけた。私はその場につづくまり、匂いを嗅いだ。

「蒲団」の様だと思ったら、涙が零れた。私は、わんわんと泣いた。幼児の様に泣き叫んだ。

女は、結婚していた。

平成二十一年。八月十九日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955i/>

本心

2010年10月8日15時05分発行